

「出雲・神話フィールドワーク」

門田 眞知子*

Field-Work at the Izumo District and the mythology

KADOTA Machiko*

キーワード：出雲，神話，荒神谷，加茂岩倉，西の谷，出雲国風土記，出雲大社

Key Words：Izumo, Myth, Kojindani, Kamo-Iwakura, Nishinotani, Izumonokunihudoki, Izumo Shrine

1. はじめに

猛暑の残る9月初め，鳥取から山陰道を西へ走る。次第に雲がたちこめてくる。野外調査にはむしろ都合のよい雲に見えた。しかし出雲（大社）インター近くまで来たとき，太陽は再びギラギラと地上を照りつけていた。山陰道の終点まで乗るのは初めてで，カーナビもなく地図ももたず，行先表示看板を頼りに，少し迷いながらも目的の鳥根県立古代出雲歴史博物館に到着した。初代館長には上田正昭氏が就任し，4年ほど前に建てられたというまだ新しい博物館である。しかも日曜日であったので，人の出入りが多い。近くには出雲大社があるが，この日むかう場所は大社とは反対方向である。

今回の調査には，専門ゼミで神話を熱心に学んでいる馬西由深さん，加藤葉月さんが同行してくださった。9月末までの土日に一畑電鉄主催のロマンバスが，有名な遺跡巡りをしてくれるという企画を，加藤さんが知らせてくれた。行きたいなーという彼女らの期待に私も心浮き立ち賛同した。ロマンバスは一畑電鉄の出雲駅では午前10時20分に，歴博（古代出雲歴史博物館）からは午後1時に出発という事で歴博の前から乗ることにし，そこまでは鳥取から車で向かったのである。3名に都合の良い9月5日の日曜のロマンバスを予約した。

ロマンバスは，2台連ねて走った。2台目はやや小型のバスであったが，2台走らせるのは今日が初めて，とその盛況ぶりに主催者側はご満悦であった。どこから来たかをまず車中で訊かれ，鳥取からは，私たちだけだったように思う。また一週間前の8月末には，鳥取市観光協会の人たちが参加しに来られたという話をされた。人気あるこの遺跡・神話観光事業の視察は大いに収穫があったのではないか。一畑電鉄の神話ガイドさんがお話をされる。イザナキ・イザナミの国生みから風土記の中の国引きの話，オオクニヌシの国造り，国譲りなどまで一連の説明をされていた。途中から二台目に乗ったが，どこかの中学生の10名ほどのグループが先生に付き添われて参加していた。

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

2. 西谷古墳（出雲弥生の森博物館）

最初に着いたのは弥生の森の博物館であった。これは、「西谷古墳」のそばに建てられた博物館であり、建物も新しく、道路を隔てた向こう側の丘陵地帯が、実は古墳であり四隅突出型という極めて古いものである。位置的には出雲市大津町。一辺40mを超えるので規模は大きいといえよう。なだらかな傾斜で上まで登れた。意外に高さがあり裾野の広がりがあった。斜面には石が貼りつめてあるという。館内には出土された男王と女王の木棺から様々な装身具のみ今日まで残り、それらを陳列していた。鉄剣及び碧玉やガラス製管玉。また祭祀土器は、吉備系や北陸系土器も認められるという。それらの地方との交流を物語る。朱（辰砂）が二重になった木棺に施されていて長きにわたる地中での保存も可能になったという。その朱は日本にはなく中国から来たらしい。弥生後期から古墳前期のものとされる。（『加茂岩倉遺跡発掘調査概報Ⅰ』第2章 加茂町教育委員会1997年）

3. 神庭荒神谷遺跡，加茂・岩倉遺跡

神の庭に位置するという荒神谷遺跡は、弥生の森より斐伊川を渡り、さらに東に位置する（斐川町神庭西谷）。先の弥生の館で求めた航空写真地図に古代の自然形態を上書きした地図には、現在の宍道湖の西側は水地帯である。暴れ川の斐伊川の故であろう。この荒神谷遺跡は古代にはまさに水際すれすれのところに位置していたのか。南側は山の方に向かう。

奥まった丘陵の中に入るような地形であるが、その低い丘陵傾斜の部分に358の銅剣と、少し離れたところに6個の銅鐸と16本の銅矛の発見（1983年）というのは確かにこの遺跡が現れない前の出雲の歴史を塗り替えた大発見であったのだ。「出雲には神話にふさわしい遺跡がないという通説」が吹き飛んでしまったとは再度、最近の梅原猛氏の言である。おそらくこの地に住み出雲史を知悉した人々にとっても歴史観を変更せざるを得ない劇的な瞬間であっただろう。これらの発掘物は、磨かれ並列され歴博に収められている。確かに迫力がある。古代人の力の漲りが伝わってくるようだ。「出雲を中心とした日本海沿岸に根強く一つの権力が存在し続けたこと」（梅原猛、『芸術新潮』No.10 古代出雲王朝, 2009年）を、これら銅剣・銅鐸らが静かに誇らしげに語っている。遙か2千年以上の古（いにしえ）のこのようだ。

そこから少し離れて東南に加茂・岩倉遺跡が位置する。ここも遅れて1996年、農道整備工事の際、39個の銅鐸が発見されたものである。今でもレプリカが発見当時の場所に埋め込まれている。加茂町は、少し内陸の山方向に斐伊川の支流の赤川が流れている地域である。

バスの車窓からは左右の田園風景も一望できた。荒神谷遺跡にむかうとき、川を渡る前（だったと思う）、上りから下りに向かいその谷間は墓地であるとの説明があったようだが、古代の墓地の上を走っているにせよ、このなだらかな上り下りの起伏は、ここ出雲の地形の特徴にも思えた。遠くに低い山が平野を囲む。平野は黄金色一色だった。出雲平野である。一部の田はすでに稲刈りを済ませていた。またその作業中のものも見られた。鳥取では稲穂の色づきを認めただけであったので鳥根の刈取りの速さには少し驚いた。山陰道走行中、東部は曇りがちだったのにこちらに来ると晴れてきたという天候の差異も実感できた。水も溢れ古代にはここはもっと広大に稲の宝庫であっただろう。とはいえ周囲に山のある風景は少し規模を小さくした鳥取の地形にも似ているように思われた。

ロマンバスが、出雲駅に戻る方角に右折するとき、左側（つまり東方向）に「熊野神社方面」と

いう標識を一瞬、目にした。それは、『出雲国風土記』の最初の国引きで新羅半島から島を引っ張ってきて国を作った後、終わったことを表す、「オウ」からくる「意宇」のある出雲の東の地域である。いま見てきた遺跡が近くにあるのではないが、意宇の方角に流れているとの印象も抱いた。

4. むすび

現在大社町には、出雲大社があり、そこにはオオクニヌシが祀られている。歴博には、大林組をはじめとして建築家や建築グループがそれぞれの解釈に基づいて古の社殿のミニチュアを作成したのが数基、陳列されている。

かつて奈良の大仏殿（15丈）より高い32丈の長く高い階段をもつ出雲大社があったという（『口遊』平安初期）。それは、オオクニヌシが国譲りの条件として建てることを要請したと、『古事記』にも『日本書紀』にも記されている。（『古事記』：「とだる天の御単の如くして、底つ石根に宮柱ふとしり、高天原に氷木たかしりて治めたまはば。」『日本書紀』：「其の宮を造る制は、柱高く太し。板は広く厚くせむ。」）

この驚異的な高さはいったいどのような意味を孕んでいたのだろうか。ヨーロッパで天を目指す、ゴシック様式の教会の尖塔と似た働きはもつのだろう。梅原猛氏のいうように、「スサノオ、オオクニヌシの出雲神話は弥生時代の話」だとすれば、国引き神話はそれ以前に属するののか。神は八束水臣津野命（ヤツカミズオミツノミコト）として、前述の「オウ」を発した神とする。その中心であった「意宇」平野一帯。そこには熊野神社と神魂神社が今も現存する。一方では、その熊野神社にはスサノオらしき神も祀られ、さらには『古事記』などにはヤツカミズオミツノミコトは、スサノオの子であるオミヅヌノカミと同一視され、そのオミヅヌノカミの孫がオオクニヌシという系譜を成す。他方、オオクニヌシはスサノオから6世とも表わされる。一体、これらの関係はどのように解釈できるのだろうか。次第に西への動きがあり西の地域が豊かになる。その最も象徴的な建物とその祭神である出雲大社とオオクニヌシは、時代的にも「意宇」の文化圏の後に位置するものなのか。出雲神話の重要な二神のもう一方のスサノオは、まず意宇に近い須賀神社に住むが、晩年は出雲大社とは異なり須佐神社に祀られたとあり、須佐神社は西に位置する。他方、スサノオとオオクニヌシは本当に相互に関係ある神々なのか。もう少し探してみたいところである。日御碕神社も謎めいている。

そして古代における溢れる水の存在。これは出雲古代文化を象徴するものであるかもしれない。

5.1 補記 フィールドワークを通して 加藤 葉月

9月初旬、古代出雲歴史博物館、出雲弥生の森博物館、荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡の4ヶ所を回り、出雲神話のルーツを学んできた。

まず、私の抱いていた出雲のイメージをさらに強くした2ヶ所の遺跡は特に印象深かった。

始めに見た荒神谷遺跡は358本もの銅剣が出土したことで有名である。私は、実際に銅剣が発見されたその場所に立った時、どうしてその場所に埋められたのか疑問に感じた。なぜならば、この荒神谷遺跡が位置している場所は、加茂岩倉遺跡同様あまり栄えていなかったように感じる場所だったからである。誰が何のためにそこに銅剣などの青銅器を埋めたのか、とても興味が湧いた。後に行った古代出雲歴史博物館には「青銅器がなぜ埋められたのか」について4つの説が挙げられ

ていた。1つ目は「土中保管説」である。土の中が安全という考えは現在でも存在するが、私はこの説ではありきたりのような感じがした。2つ目は「隠匿説」。青銅器が有事の時に奪われなためだと書かれていたが、1つ目の説と似ている。3つ目と4つ目は、私は特に古代らしいと感じた。それらは「地鎮説」と「境界埋納説」である。地の神への捧げものとして埋めたという考えと、邪気・悪霊を払うために土地の境に埋めたという考えである。この2つの説はなかなか的を射ているように感じたが、実際はどの説も決め手を欠いているので明確には分からないらしい。しかし、分からないことや不思議なこと、謎があればあるほど考えるのは楽しいと思う。神話について学ぶとき、知識が乏しく、分からないこともたくさんある。しかし、たくさん謎に出会ったとき「何でだろう？」と考えることが面白い。昨年、白兔神話について調べたとき、ガマが実際は植物の「蒲」なのか、鉦山用語としてのガマなのか、富山県の金屋町の方言で粘土を意味する「がま」なのか、たくさん方向から考えた。しかし、植物の蒲を上回る「ガマ」の説を打ち立てるにはどちらの説も決め手を欠いていた。このときに、何かを調査し「答え」が出ることはもちろん大切だが、私はその途中でいろんなことを考えることも大事なのではないかと感じた。

次に見た加茂岩倉遺跡は、荒神谷遺跡よりももっと静かで自然が豊かな場所だったように感じる。荒神谷遺跡は大きな集落があってもおかしくないような広い土地であったが、加茂岩倉遺跡は山の中に位置しており、道が整備されていなければ銅鐸が発見された場所までもいけない。とてもひっそりとしている印象を受けた。この遺跡は39個もの銅鐸が発見されたことで有名である。そこには埋められたままの状態で身を横たえている銅鐸が姿を見せており、発見されたその状態のままを見ることが出来た。約2000年前の銅鐸がそのままの形でこの現代に残っていることが素晴らしく、感銘を受けた。加茂岩倉遺跡を含め、これらの青銅器が埋納されている場所の特色として、古代出雲歴史博物館では3つ挙げられていた。1つ目は「見通しの悪い山の斜面」、2つ目は「見晴らしの良い山の斜面」、そして3つ目は「集落周辺の開けた場所」であるらしい。しかし、1つ目ならともかく、2・3つ目であれば、なぜ近年まで発見されなかったのだろうと不思議に感じる。このときにふと思い出したのだが、以前読んだ梅原猛の著書に、『大量の青銅器が出土した遺跡のある場所は昔から崇りがあるので近寄ってはならないところとされ、人々もそこを通る時は恐る恐る通った。』（梅原猛『葬られた王朝 古代出雲の謎を解く』新潮社2010）という記述がある。そのように、古くから何かしらの形で守られてきたことを思うと、やはり青銅器はその時代において重要な役割をしていたのだろうと感じざるを得ない。

そして加茂「岩倉」の岩倉という地名についても、鳥取にもあるが、「磐座」から由来しているのだろうかと考えるとやはり神の御座所であったのかなと思ってしまう。

今回のフィールドワークを通して、いろんな知識に乏しいと再び感じた。そして、もっと勉強してから行けばよかったと感じたが、実際にその場所で見えて感じたことは座学では味わえないものだっただろうと感じる。出雲弥生の森博物館で見た、四隅突出墓もあれほど大きいものだとは知らなかった。実際に行ってみなければどのような場所で青銅器が発見されたのかも分からない。本で学ぶことも大きいですが、出かけてみることで新しい発見もあり、もっと出雲や神話について知りたい、学びたいと思った。非常に密度の濃いフィールドワークであった。

5.2 補記 出雲の地を訪れて 馬西 由深

9月5日、地域文化専門ゼミⅠの講義の一環で、門田先生の引率のもと、出雲市を訪れた。到着後は、古代出雲歴史博物館や西谷古墳、荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡等を1日で巡って古代出雲文化に触れる、という趣旨のバスツアーに参加させていただき、ガイドさんや学芸員の方にお話を伺いながら資料や現場を見学することができた。

今回のフィールドワークを通して、遺物や遺構は人々の生活をひも解くヒントとなり、ネットワークを証明する貴重な証拠品であるということを実感した。まず、荒神谷遺跡では、行き止まりになっている地に大量の銅剣が丁寧に並べて埋められていたということに加え、近くから銅鐸も一緒に発掘されたことを知った。そのことから、人々がそれらの物品を同時代に用い、大切にしていたということが推測できるとともに、保管や保護のため、あるいは神へささげるために埋蔵したと考察できるということを再確認した。当時の地形については、まだ勉強不足で理解が及んでおらず、現在の環境をもとに考えてしまっていると思われるが、森林の中の斜面にまとめて埋められていた様子から儀式的な風景が想像され、その地を訪れたときには神聖な空気が漂っていたように感じた。加えて、険しい山々に人々が生活していた形跡があるという事実、湖山池周辺と類似点があるかもしれない、と想像した。昨年、地域文化調査という調査実習において因幡の白兔神話について研究する機会を得て、そのなかで、兎伝承を土師氏が伝えたのではないかと推論を立てた。そして、その人々を調査することを目的として、湖山池を囲むようにして鎮座する天穂日命神社や天日名鳥命神社、御熊神社を訪れたのだが、それらはいずれも山中にあり、各々の境内に向かうには急な斜面を登っていかねばならなかった。さらに、それらの周囲には、山を切り開いて形成されている集落も見受けられた。荒神谷遺跡周辺もそうだが、なぜ、わざわざそのような条件の厳しい場所に生活の拠点を置いたのだろうか。もしかすると、何か部族的背景があり、そうせざるを得なかったのかもしれない。

また、墳墓の形式に関しては、山陰地方では地域ごとに特色のあるものがつくられていた弥生時代において、四隅が突き出た形をしている四隅突出型墳丘墓がつくられていた。その独特な形をした墳墓の形跡は、出雲のほかに広島、安来、鳥取、北陸等でも確認できるというお話を伺うとともに、全国各地から持ち込まれたと考えられる物品やその材料となる資源からつくられている副葬品も拝見した。私は、墳丘墓跡を見て、その大きさを体感し、ショベルカーやクレーン等の機械がない状態でそれをつくり上げる彼らの労力とそれを命令して従わせることのできる豪族の権力に驚くとともに、博物館に所蔵されている想像以上に完成度の高い品々を目前にし、彼らの創造力に感心させられた。さらに、時間の経過に伴って生活様式も変化し、それに合わせて物品の大きさや形が少しずつ変化し、それらの持つ役割が変遷していくのが見てとれ、人間の想像力によりいっそう興味を持った。また、上下関係等の明確な関係性は想像の域を超えることができないにしても、各地と何らかの交流があったということが明らかであるということを実感することができた。出雲の地に全国各地の文化が集合しており、そこには因幡・伯耆の地の要素も窺える。また、その逆も確認することができる。古代の人々は、当時使われていたと推測される物品を用いて暮らし、現在のそのような便利な交通・輸送手段がない中、時間をかけ、苦勞しながら移動していた。そのような生活のかたちが『古事記』の記載に反映されているのであろう、と考えられ、さらに調査のモチベーションを高める事ができた。



図1 西谷・四隅突出型古墳



図2 四隅突出型の裾野



図3 収穫直前の出雲平野



図4 一畑・ロマンバス



図5 神庭荒神谷遺跡



図6 加茂・岩倉遺跡への道



図7 入れ子銅鐸のレプリカの前で



図8 歴博の玄関（後ろに巨大本殿の柱）